

---

# ゆるやかな自殺

ハットリミキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゆるやかな自殺

### 【Nコード】

N7490J

### 【作者名】

ハットリミキ

### 【あらすじ】

香織先輩に呼び出されて、僕は公園に向かった。

「ビール買ってきて！」

僕は知っていた。寒い冬の公園で、彼女がしようとしていたことを。

僕が公園にたどり着いた頃にはすでに陽は落ちていて、周囲はまるで冷凍庫のようだった。

この冬一番の冷え込み、と今朝の天気予報で言っていた。

誰もいない公園の中、香織先輩がただ一人、ベンチに座っていた。先輩はこの寒いのに身体を縮ませることもなく、ただ硬い表情でじつと地面を見ていた。遠目からはマネキン人形のようにも見えた。

「香織先輩！」

僕が駆け寄ると先輩は全身の緊張を解き、僕にホツとしたような笑顔を見せた。

「金城君、ごめん。ありがとねー」

「いいえ」

僕はコンビニ袋を先輩に渡した。中には数本のビール。先輩に頼まれたものだ。

先輩はそのうちの一本を取りだして、飲み口を開けようとした。けれど先輩の爪はキレイに伸ばされていて、折れないように悪戦苦闘していた。見かねた僕はそれを取り上げて、代わりに開けた。

「ありがと。金城君も飲む？」

僕は笑顔で首を横に振った。先輩は「そう？」と残念そうにしながらも、

「それじゃ、いただきまーす」

と飲み始めた。ぐびりという音が聞こえた。これが真夏の太陽の下なら爽快だ。けれど真冬の今では見るだけでも凍えそうだった。

「あーっ、おいしい！」

ぷはあっと大きく白い息を吐いて、先輩は妙にはしゃいでいた。

香織先輩はいつもこうなのだ。つらいこと、悲しいこと、苦しいこと……どんな時でも僕ら後輩の前ではがんばって笑っている。

先輩はそれからしばらく黙ってビールを飲んでた。そして一本をあつと言う間に空けた。僕は二本目の蓋を開けて彼女に渡した。先輩もそれを当たり前のように受け取って、また口をつけた。

僕は知っていた。香織先輩が何をしようとしていたのかを。

先輩は、死のうとしていたのだ。

だけど、止めて欲しいとも思っていた。

だから僕を呼んだ。

先輩が呼べば、ゼミだろうがバイトだろうが、すべてをキャンセルしてやってくるこの僕を。

「ごめんねえ」

二本目を半分くらい飲んだ後で、香織先輩は済まなそうな顔をしていた。

「いいえ」

とだけ僕は返した。

先輩の目は真っ赤に潤んでいた。寒さで鼻の頭も赤くなっていた。ただ震えている様子は無かった。冷たいビールを飲んで冷えないのだろうか？ 雪国出身の香織先輩にはこのくらいの寒さは平気なのか？

先輩は故郷の冬の厳しさを、南国出身の僕に三時間も語ってくれたことがあった。

サークルの新歓コンパの時に、酔っぱらった先輩が僕の出身地を知って、

「まあ、聞きなさいヨ」

と、周囲が止めるのも聞かずに滔々と話し出したのだ。

けれど僕はそれが苦痛ではなくて、むしろ有り難かった。故郷を遠く離れて始まった新生活は、不安で一杯だったのだ。それが彼女のおかげで和らいだのだから。

その翌日、僕は先輩に謝罪された。けれど僕が楽しかったということとお礼をうと、先輩はとびきりの笑顔を見せてくれた。

そんな感じで香織先輩と僕は親しくなったのだ。それ以来、先輩

は幾度となく“雪国自慢”をしてくれた。それを酒の席の度に聞くのが、僕の楽しみの一つとなった。

「なんか、眠くなってきたナー」

先輩はトロンとした目をして、僕の肩にふわっと頭を付けてすぐに戻った。一瞬だったけれどいい香りがして、どきっとした。

「ダメですよ。死んじやいますよ？」

「んふふ」

聞いているのかいないのか、先輩はご機嫌だった。

僕は知っていた。憶えていた。

「私の遠い親戚なんだけどね、凍死した人がいるのよ」

先輩の数ある“雪国自慢”の一つとして出た話題だった。

先輩の実家近所に住む親戚のおじさんが、同じ町内の葬式に出たきり戻らなかつた。葬式を出した家は、ちゃんと帰ったものだと思っていた。そして家の人は、寝ずの番に参加していると思っていた……。

その人は道端のお地藏さんにもたれかかったまま、冷たくなっていたという。

「おそらく、酔っぱらって寝ちゃったのね。でも、すんごく幸せそうな顔してたんだって」

「寒くないんスカね？」

さすがに疑問に思った。

「酔っぱらってるからね、わからないんじゃない？」

自分の実家だと、外で寝たくらいで死んだりはしない。酔っぱらって路上で眠っていて、車に轢かれたじいさんなんかはいたけれど、「ほら。『マッチ売りの少女』も最後は結局凍死でしょ？ しかも楽しかった頃の夢とか見て、幸せそうに死んじやう。『フランダーズの犬』のラストも、そんな感じだったし。

凍え死ぬ時っていうのは何かアドレナリンみたいのが出て、幸せに感じたりするんじゃない？ ゆるやかに死ねるんじゃないかしら」  
ゆるやかな死ってのは、何なんだろう？ どのみち僕には想像が

難しかった。

「このまま寝ちゃったら、死ねるかな？」

先輩は僕の顔をのぞき込んで、いたずらをしているみたいな表情で言った。

これは、香織先輩のゆるやかな自殺行為なのだ。

「何言ってるんですか。もう行きませんか？」

「どこへー？」

「ほら、小田先輩んちで鍋やるって言ってたじゃないですか。行きましようよ。」

「いやー」

「嫌って……」

先輩はまだご機嫌の様子で、二本目のビールを空にした。そして三本目を僕に黙って付きだした。僕はあきらめて蓋を開けた。

「ガンガン飲んで、あんなヤツ、忘れてください」

そう言うと、先輩の表情が強張った。

僕は知っていた。先輩が死にたい理由。

香織先輩は、山崎と別れたのだ。

山崎は香織先輩と同じゼミだから僕にとっては“先輩”だけど、“先輩”なんて付けたくないくらい嫌なヤツだ。

僕が香織先輩と知り合って、まもなく二人が付き合っていることを聞いた。少しガツカリしたけれど、後で山崎の本性を知って余計に悔しかった。

山崎は他に女がいた。それも一人や二人じゃなかった。

こっちで就職している従兄が僕にはいて、偶然その人の勤め先が山崎のバイト先だった。ヤツは同じバイトの女子高生数人に手を出して、うち一人は妊娠までしたらしい。金出して墮胎させたとか腹を蹴ったとか、不確かな話をいろいろ聞いたけれど、いずれにせよいくらイケメンだからって許されることではない。

僕は企んだ。

その従兄に手助けをしてもらって、それらのことが周囲……つ

いいには香織先輩にまでばれるように仕向けたのだ。結果、妊娠させた女子高生の親が出てきて、慰謝料だの賠償金だのという話になっただらいい。ざまあみる。今は相当追い詰められていると聞いたけど、いい気味だ。

そうしたこと僕にもチャンスが来るかもと妄想もした。けれどあのいけ好かない山崎と別れるだけでも、僕には十分だった。

案の定香織先輩はこれらの話を聞くとすぐに激昂し、山崎に別れを告げた。先輩の性格を考えると絶対そうなるかと読んでいたから、うまくいったと思っていた。

だけど。

「おいし……」

僕は先輩の横顔を見た。よく見ると唇は紫色で小さく震えていた。予想外だったのは、思いの外香織先輩がダメージを受けていたということだった。

明るかった先輩は落ち込み、みるみる痩せていった。その様子を見る度、気持ちが悪かった。そんなにアイツが好きだったのか……と。

小田先輩の家で鍋パーティをやっているのは本当のことだ。小田先輩は朴訥として見かけはぱっとしないけれど、面倒見が良い好人物だ。今日の鍋パも、実は香織先輩を元気づけたいから開催したのだ。

小田先輩は、香織先輩のことを好きなのだと思う。

小田先輩が相手なら僕は納得できる。小田先輩なら、彼女を幸せにできるだろう。

「寒いでしょ。もう行きましょう」

香織先輩はそこを動かさなかった。

先輩は意地っ張りなところがある。そこがまた、かわいい。

こんなかわいい香織先輩だもの。小田先輩は、すごく大事にしてくれるはず……。

「金城君」

不意に先輩は僕に手を伸ばし、僕の頬に触れようとした。

「！」

僕は慌てて顔を逸らした。

「え……」

先輩は少しシヨックを受けた様子だった。

「いえ、今日、顔洗ってないんで」

理由になっているのかなっていないのか、よくわからない言い訳をした。

先輩、ごめんなさい。本当は、僕は。

「ごめん。金城君、あつたかそうだったから。ごめんね」

僕は彼女の顔を見ないまま、首を横に振った。そんなことはどうでもいいんですよ、先輩。いつもだったら、「こら！ 顔くらい洗いなさい！」って叱ってくれるじゃないですか。早く元気になってください。

「行きましようよ」

「……」

「小田先輩んち。鍋であつたまりに行きましよう」

先輩は少し考えてから頷き、それからゆっくり立ち上がってから伸びをした。あたたかそうな白い呼気が、先輩の口元から大きく漏れていた。

「ほんと、ごめんね。心配かけて」

僕に向かつて、笑顔でそう言った。声が明るくなった。

「いつまでもこんなんじゃ恥ずかしい。こんな先輩じゃ、金城君も嫌よね？」

そんなことないです、かわいいですよ……とはさすがに言えなかった。ただ首を横に振りながら、僕もゆっくりと立ち上がった。

「ふうっ、寒いねえ！ 行こうか」

先輩は大げさに身を震わせて笑顔を見せた。

安心した。もう香織先輩は大丈夫。

二人で公園の出口まで歩き、僕はそこで足を止めた。

「? どうしたの?」

「俺、バイト抜けてきてるんですよ。戻らなきゃ」

小田先輩の家とは反対方向を指さした。

「そうなんだ……残念」

「すみません」

僕は頭を下げ、彼女が小田先輩の家の方向へ向かうのを見届けた。先輩は角を曲がるまで、ずっと僕に手を振っていた。

姿が見えなくなつてから僕は先輩が座っていたベンチへと戻り、そこに腰を下ろした。

すみません、香織先輩。

僕、さつき、山崎に刺されたんです。

あいつ、思っていた以上に香織先輩に惚れていたみたいで。

僕が香織先輩にいろいろばらしたことに気付いたんです。バイト先に来たアイツに呼び出されて、そこで僕、いきなり刺されたんですよ。腹のところですけど。

僕、悔しくて……自分を刺したナイフを取り上げて、反撃しちゃいました。最後まで見届けてはいないけれど、首からすごい血が噴き出ていたから多分ヤツもダメだと思います。

ほんとうは先輩のこと、抱きしめたかったです。

でも顔も、手も、身体中すべてが氷のように冷たくなっていたから、できませんでした。

少し眠くなってきました。

思ったほど、嫌な気分ではないです。

まだ少し寒いけれど、このままゆるやかに眠れますかね……?」

了

(後書き)

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7490j/>

---

ゆるやかな自殺

2010年10月8日15時09分発行